

商品安全
検査センターから

秋からも気を抜かないで！食中毒への注意

食中毒の発生傾向が変化しています。
これからの季節も気をつけたい食中毒についてお知らせします。

暑い日が続いていますね。9月とは言え、まだまだ食中毒への注意は怠れません。

近年、食中毒の発生傾向が変化しています。必ずしも「食中毒は夏の注意事項」とは言えなくなってきているようです。昨年の食中毒月別事件数・患者数と、5年前(平成20年)を比較したグラフを見てみましょう。どちらも夏から秋にかけて、冬に増えているのがわかります。夏場は食中毒に気を遣うため抑制効果が出ているようですが、9月になると気が抜けるのか、事件数・患者数とも増加の傾向にあります。

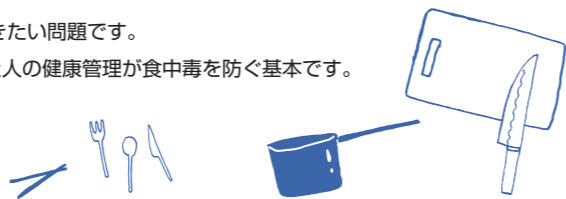
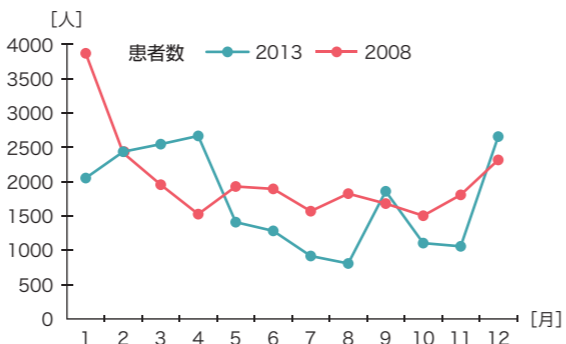
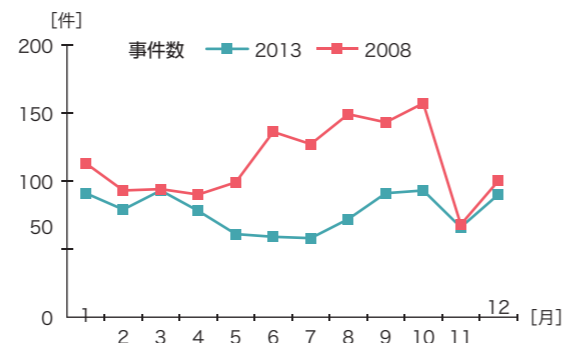
また昨今は、冬でも食中毒には注意が必要です。冬の食中毒は、ほとんどがノロウイルスによるものです。昨年のグラフでは、4月くらいまでピークが下がっていません。

ノロウイルスは細菌よりもはるかに小さな病原体で、ごく少量(100個程度)でも感染します。そのため、経口感染、飛沫感染、接触感染など、いろいろな経路で感染が広がります。調理者からウイルスが食品に移行することで、食中毒の原因にもなります。ノロウイルスは感染していても症状を示さない「不顕性感染(ふけんせいかんせん)」も確認されており、症状の無い人が気づかずに調理をして食品を汚染してしまうことも。また発症して回復した場合でも、症状が無くなってから1週間以上、糞便からノロウイルスが排出されることもあります。

今年の春先も、ノロウイルスによる食中毒が発生しました。気温が上がってきても、ノロウイルスが減らなくなっているのかも知れません。

このように、食中毒は「夏場の注意事項」だけではなく、1年中気を配っていききたい問題です。これまでお伝えてきたように、食品の温度管理、調理器具の衛生管理、また人の健康管理が食中毒を防ぐ基本です。キッチンに立ったとき、ひと呼吸して思い返してみてくださいね。

2008年度と2013年度の食中毒事件数、患者数の比較



2014年度 第2回理事会だより
| 7 / 9 |

1 6月期決算について承認しました

6月度事業結果 単位:百万円

	6月実績	計画比(%)	累計実績	計画比(%)
商品の供給高	2,256	102.4	6,282	104.0
総事業高	2,326	102.3	6,474	103.8
事業経費	478	97.4	1,406	97.5
経常剰余金	63	318.2	76	-176.6

組合員数 222,758名 計画比99.9% (加入904名)
出資金 38億8,635万円 一人当たり出資金17,447円

2 コープぎふ15周年の取組みの一つとして、15周年記念フェスタを開催する事の報告がありました。15周年記念フェスタは、岐阜市の岐阜産業会館で10月11日(土)、12日(日)の2日間開催します。

3 共同購入事業関連

- 1 eフレন্ズのWebカタログを8月4日から開始する事が確認されました。
- 2 9月から導入するペア宅配と2015年度から実施する組合員さんの利用応援、班利用の方への対応について確認されました。
- 3 スマイル便の配送を委託しているヤマト運輸より運賃値上げの要請があり、8月1日より一部の配送地域でスマイル便を値上げする事が確認されました。

子どもたちは、地震・津波の恐怖はもちろん、親や友人との離別など大人でさえ乗り越えるには困難な体験をしてきました。先ごろ河北新報社(宮城県に本社を持つ新聞社)が沿岸部の小学校を対象に行った調査(※)では、約7割の校長が「自校の児童・生徒に震災の影響と思われる問題がある」と答えています。小林純子さん(災害子ども支援ネットワークみやぎ代表世話人は「震災後3年の間に再就職できたり、自宅を建てたりして生活再建できた家庭と、未だに回復できていない家庭の状況はかなり異なり、それが子どもにも反映している」と言います。震災で受けた心の傷が十分にケアされず、ストレスを溜めている



「子どもたちの心のケアは、専門家でなくても構いません。家の人や、近所のおじさんおばさんなどが、よく話を聞いてあげるだけでもいい」と小林さん。

また「学校や幼稚園・保育園ではスクールカウンセラーや先生方が子どもを支えてきたが、乳幼児はそつした組織的なケアがな

子が多いこと。保護者の傷つき度合いが激しいほど、子どもの気持ちは放置されがちなこと。そのなかで大人の様子を伺いながら、じつと我慢している子どもたちが多いことを、小林さんは憂います。

かつたため、震災体験を強く引きずっている母子もいる」と、乳幼児へのケア不足も指摘します。なかには母親がうつ状態となったため、震災後に生まれたにも関わらず、無表情などのうつ症状が出ている乳幼児の例もあります。「津波や地震を体験しなかつたから大丈夫というわけではなく、震災の影響は後々まで引き継がれていってしまう。これから10年、20年とずっと見守っていくことが必要」と小林さんは訴えます。震災体験を語り継ぐ一方で、傷ついた心は引き継がないようケアしていく努力が、関係者はもとより、周囲のすべての大人に求められているのかも知れません。

※河北新報社が2013年12月宮城県沿岸自治体15市町の公立小中学校245校を対象に実施した調査

ケアされない子どもたちへ
さらに支援を



第10回

3・11を忘れない
みやぎ生協から
被災地・宮城のいまをお伝えします

コープぎふは、東日本大震災の復興対策に継続して取り組んでいます



おいしい♪楽しい♪コープぎふ15周年

つながりあって『ぎふ』まるごと実感フェスタ開催します

10月11日(土):10時30分-16時 12日(日):10時-15時
岐阜産業会館(岐阜市)



おいしさ まるごと

- マグロ解体実演販売・北陸鮮魚市
- ぎふを食べよう(岐阜県産品)
- コープの新商品紹介
- お気に入り商品の試食と人気投票
- みんなの声で改善した商品の紹介

みんなで楽しく

- キャラクターショー
- ステージでの演奏・ダンスの発表など
- ファッションショー
- クラフトバザー
- 子ども縁日

学んで発見

- 講演会 「お母さんのための食の安全教室」
- 映画上映会
- 生協の社会貢献活動の紹介
- 地域団体の様々な活動紹介

ためして実感

- スクロール2014年秋冬物の試着・販売、アウトレット、メイク相談など
- 住宅、共済、夕食宅配、福祉、葬祭、旅行など、コープぎふの事業・サービスの紹介

そのほか、ご家族で楽しめる企画が盛りだくさんです。
*各種企画は調整中のももあり、変更する場合があります。

詳しくは次号のDEKO、週刊コープぎふ、ホームページ等でご案内していきます。